



【#6】 秋の蚊のオハナシ

Text by 小助川 駒介

Komasuke KOSUKEGAWA

強くなりたい、というのが俺の唯一の願いだった。

生まれた時から父はいなかった。

母が父の話をしたことはない。

頑なに閉ざしたような母の横顔を見て、

なにごとか触れてはいけないことがあるのだろう、

そんなふうに感じていた俺は、

父のことを聞くこともできずに育った。

小学生になると、俺はいじめられるようになった。

もともと体がひ弱かったこともあるが、

俺の父のことは、

この辺のものはみんな知っていたらしい。

「メカケの子」

石を投げられたり、囲まれて殴られたりするとき

投げつけられるのはこの言葉だった。

俺はそのことは決して母には話さなかった。

卒業式が終わって、帰ろうとした時、

いつもの顔ぶれがいつものように俺を囲んだ。

そしていつものようにあの言葉が投げかけられた時、

俺の中に溜まっていたものが迸り出た。

頭の中は真っ白になり、ほとんど覚えていない。

全てが終わったあと俺が見たのは、

血だらけのまま倒れているあいつらの姿だった。

小学校で過ごした六年間の間に、

俺の体は思った以上に

スピードとパワーを身につけていたのだろう。

その話は伝説めいて広がり、

おれは近隣のワルから狙われることになった。

しかし、何かが解き放たれた俺の怒りは

留まることを知らず、

刃向かってくるものはすべて

容赦無く叩き潰していった。

売られた喧嘩を全て買う日々の中で

ある男が俺の前に現れた。

挑発的な言葉を放つその男を

いつものように拳で黙らせようとした時、

異変は起こった。

道端に倒れていたのは俺だった。

呼吸もできぬほどの痛みに耐える俺を

男は笑いながら見て言った。

お前のその無限の怒りで

いくらでも金が稼げるぜ。

それが俺の、ボクサーとしての人生の始まりだった。

天性の素質があったのだろう、

俺はあつというもに実力をつけ、

プロとしての階段を駆け上っていった。

俺の試合には、人が押しかけ

巨額の金が動くようになった。

日本に敵はいなくなり、

世界タイトルをかけた試合が

組まれることになった。

俺はマスコミに日本の英雄とてはやされた。

世界戦の結果について語ることは何もない。

試合開始後、30秒で俺は意識を失った。

たった一つのパンチで、

俺は全てを失った。

手のひらを返したように、

俺はマスコミから、ボクシングファンから

貶され、見放された。

日本にもう、俺の居場所はなかった。

失意の底にどれだけいたのだろうか。

俺の中で、小さく残ったともし火が、

また燃え始めた。

こんなところで終わるわけには行かない。

俺にはこの拳しかない。

強くなって、金を稼いで、

一人で俺を育ててくれた母親に

樂をさせなければならない。

自分を鍛え直すために、

俺はあらゆる武道の達人を訪ね歩いた。

その老人は中国の奥深い岩山に

一人で住んでいた。

老人は言った。

必要なのは、まず己の気配を消すことだ。

気配を消すことで、相手は技への対応が遅れる。

その一瞬の遅れこそが、勝敗の差となる。

老人はそう言って、一膳の箸を俺に渡した。

八月も終わりの森の中で、俺は過ごした。

ひたすら気配を消し、目を閉じ、

呼吸を整える。意識を研ぎ澄まし、集中する。

時間の感覚が変わり、細部が巨大化する。

一匹の蚊が、俺に近づいてくる様子が

文字通り手に取るように見えてくる。

蚊の羽ばたきの、羽の動きまでが見えるようだ。

この蚊に、俺の気配を悟られてはならない。

蚊の羽音はすぐそこまで来ている。

まるで巨大なヘリコプターが近づいてくるようだ。

今だ。

俺は老人からもらった箸を閃かせ、

一匹の弱々しい蚊を、

生きたまま掴み取っていた。

秋の蚊をしばし泳がせたるころ

櫛未知子